

それはともかく、このようにアメリカは企業の利益を守るためにCIAを使ってでも転覆しようとするのです。この一端をナオミ・クラインは次のように述べています。(前掲書『ショック・ドクトリン』第2章 90頁)

一九七二年三月、レテリエル(チリの駐米大使)とITT(国際電話電信会社)との間で切迫した交渉が行なわれている最中、ジャック・アンダーソンという全米配信の新聞に寄稿するコラムニストが資料に基づく暴露的な連載記事を發表した。

大統領選挙の2年前、ITTとCIAおよび国務省との間で、アジェンデの大統領就任を妨害する秘密計画が企まれたというのだ。

この記事を受け、民主党が多数を占めるアメリカ上院が調査に乗り出した結果、大規模な陰謀の存在が明らかになった。

ITTがアジェンデの反対勢力に100万ドルに上る賄賂の提供を申し出、「チリ大統領選の結果を操作する秘密計画にCIAを引き込もうとした」というのである。

しかし、何年にもわたるアメリカによる執拗なまでの不正工作にもかかわらず、一九七三年、アジェンデは依然として政権の座にありました。800万ドルの秘密資金をもつても、彼の権力基盤を揺るがすことはできなかったのです。

それどころかこの年におこなわれた中間選挙では、アジェンデの党は一九七〇年の大統領就任時よりも

チリ大統領サルバドール・アジェンデ



チリの独裁者だったピノチェト将軍



得票数を増やしたのでした。資本主義とは異なる経済モデルへの願望がチリに深く根を下ろし、社会主義に対する支持が増大しているのは明らかでした。

そこで最後の手段としてピノチェト将軍を使って軍事

クーデターを起こそうとしたのです。

ではアメリカはチリ軍部にどんな教育をしたのでしょうか。その結果、どんな惨状が生まれたのでしょうか。

以下は同じくナオミ・クラインからの引用です。

クーデターに至るまで何年もの年月にわたり、アメリカから指導員（CIA要員もかなりいた）が送り込まれた。

彼らは、チリの軍隊に徹底した反共教育を施し、社会主義者とは事実上ソ連のスパイであり、彼らはチリ社会には馴染まない「内なる敵」だという意識を叩き込んだ。

だがチリ社会にとって真の意味で内なる敵となったのは、本来守るべきはずの一般大衆に対して銃

―を向けることも辞さない軍だった。(前掲書105頁)

このような事実を考えると、日本の自衛隊もアメリカ軍との軍事演習を何十年も重ねてきていますし、アメリカで教育を受けた幹部も少なくないという事実がありますから、日本もどんな事態になっているのか、考えるだけでも恐ろしくなります。

それはともかく、この教育を受けたチリ軍部は、その後どんな行動に出たのでしょうか。ナオミ・クラインの説明は次のように続いています(同書105頁、傍線は寺島)。

アジェンデが死亡し、閣僚たちが捕らえられ、表立った大衆の抵抗行動も見られなかったことから、軍事政権の戦闘はその日の午後には終了した。

元駐米大使レテリエルをはじめとする「VIP」(政権幹部)の捕虜は、シベリアの強制収容所のピノチェト版とも言うべき、チリ最南端のマゼラン海峡に浮かぶドーソン島へ送られた。

だがチリの新たな軍事政権にとって、アジェンデ政権中枢部を殺害・拘束しただけでは、まだ十分ではなかった。軍の幹部は自分たちが権力の座にとどまれるかどうかは、チリ国民がインドネシア国民のように真に恐怖の状態にあるかどうかにかかっていることを知っていた。

機密解除されたCIAの報告書によれば、クーデターの直後、およそ1万3500人の市民が逮捕され、トラックで連行され拘束された。

うち数千人はサンティアゴの2つのサッカー・スタジアム、チリ・スタジアムと巨大なナシヨナル・スタジアムに連れて行かれ、ナシヨナル・スタジアムではサッカーの代わりに見せしめの虐殺が行なわれた。

兵士たちは頭巾をかぶった協力者を伴って観客席を回り、協力者が「破壊分子」だと指差した者をロッカールームやガラス張りの特別観覧席に連行し、拷問した。何百人もが処刑され、やがて多くの遺体が幹線道路脇に放り出され、市内の水路の濁った水に浮かんだ。

## 6

右の引用部のなかの傍線部では「インドネシア国民のように」とありますが、これは当時のスカルノ政権が、同じくCIAの指導の下に、スハルト將軍によって政權転覆させられたことをさしています。

このクーデターで、「数カ月のあいだに70万人もの人びとが虐殺された。そのほとんどが土地なし農民だった」(チョムスキー『アメリカが本当に望んでいること』現代企画室、86頁)わけですが、ピノチェト將軍は、この先例に従おうとしたわけです。

さらに、「うち数千人はサンティアゴの2つのサッカー・スタジアム、チリ・スタジアムと巨大なナシヨナル・スタジアムに連れて行かれ、ナシヨナル・スタジアムではサッカーの代わりに見せしめの虐殺が行なわれた」と書かれています。

そして、その残虐ぶりは、「何百人もが処刑され、やがて多くの遺体が幹線道路脇に放り出され、市内の水路の濁った水に浮かんだ」という描写にも表れているのですが、それをもっと具体的に描写したものが次の記述です。

— サンティアゴでチリ・スタジアムに連行された人々のなかには、伝説的な左翼フォーク歌手ビクト



惨殺されたフォーク歌手ビクトル・ハラ

ル・ハラがいた。彼が受けた扱いには、一つの文化を圧殺しようとした猛烈なまでの決意が如実に表れている。

チリの真実和解委員会の報告書によれば、兵士たちはまずハラが二度とギターを弾けないように彼の両手を打ち碎き、それから銃で44回も撃ったという。死後も彼が人々に影響を与えるのを恐れた軍事政権は、彼の演奏のオリジナル録音をすべて破壊しよう命じた。

フォルクロレ歌手のメルセデス・ソーサは亡命を余儀なくされ、革新的劇作家のアウグスト・ボアールは拷問を受けたあげくにブラジル国外へ追放された。エドゥアルド・ガレアーンもウルグアイから追放され、ウォルシユはブエノスアイレスの路上で殺害された。ひとつの文化が意図的に抹殺されようとしていた。

このように、残虐に殺されたひとたちは単に活動家だけではなく、チリが世界的に誇りにしている歌手・作家・芸術家など多様な文化人にまで及んでいました。その典型例が伝説的なフォーク歌手ビクトル・ハラでした。

ハラは、首都サンチャゴのチリ・スタジアムに連行され、観衆のしている前で、「二度とギターを弾けないようにと、彼の両手は打ち碎かれ、それから銃で44回も撃たれる」という、実に残酷な殺し方をされているのです。

銃で「44回も撃たれて」死亡しているのですから、「二



『火の記憶』で世界的に有名な作家  
ガレアーノ

7 界的に有名になったウルグアイの作家エドゥアルド・ガレアーノ、アルゼンチンの著名な記者ロドフォ・ウォルシユなどが、次々と暗殺されたり、国外追放されたりしたことによく表れています。

さて、2つのサッカースタジアムでの例に見るとおり、このように首都サンチャゴでは恐怖作戦が荒れ狂ったわけですが、その作戦を首都の外にも広げるために、ピノチエトは更なる虐殺テロを展開することになります。

ナオミ・クラインの説明は次のようになっています。(前掲書、上巻106-106頁)

度とギターを弾けないようにと両手を打ち砕く」必要はなかったはずですが、これは「ピノチエト將軍に刃向かうものはこのような運命にあうのだぞ」という国民全体に対する恐怖作戦だったことは間違いありません。

そして、このようなクーデター独裁政権が南米全体に広がっていたことは、アルゼンチンの有名なフォルクローレ歌手のメルセデス・ソーサ、ブラジルの革新的劇作家のアウグスト・ボアール、『火の記憶』で世

恐怖を首都の外にも波及させるため、ピノチェトは冷酷無比な部下セルヒオ・アレジャーノ・スタルク將軍に命じて、「破壊分子」が拘束されているチリ北部の一連の収容所をヘリコプターで次々に巡回させた。

スタルク將軍が率いる殺戮部隊は、拘束者のなかから名の知られた者を、多いときには26人も選出しては処刑した。

この流血の4日間はのちに「死のキャラバン」と呼ばれ、ほどなくチリ全土に「抵抗は死を意味する」というメッセージが広まった。

ピノチェトの戦いは一方的であったにもかかわらず、その効果はどんな内戦や対外侵略にも劣らないほどすさまじかった。

この虐殺のニュース「死のキャラバン」は世界中に激しい抗議を呼び起こし、ヨーロッパや北米の活動家は自国政府に対し、チリとの貿易を停止するよう強力なロビー活動をおこなうようになりました。

国際ビジネスに門戸を開くことを存在理由とするピノチェト政権にとって、これは明らかに好ましくない結果でした。そこでピノチェトは、恐怖を広めつつも詮索せんさくずきな世界のメディアの目に留まらないようにするという新しい戦術に移ることになります。

こうしてチリでは、ピノチェト政権は、人々を「誘拐ゆうかいし」「行方不明」にするという戦術を取り始めました。ナオミ・クラインによれば、それは次のように展開されました。(前掲書、上巻124-125頁)

チリではやがてピノチェトが、人々を「行方不明」にする戦術を取る。

公然と殺害したり逮捕するのではなく、反体制派の人々を拉致して秘密の収容所に連れて行き、拷

問を加え、多くの場合、殺害するのだが、表向きは何も知らないと言い張るのである。

殺害後、遺体は集団墓地に投棄された。

一九九〇年五月に設置されたチリの真実和解委員会によれば、遺体のなかには「浮き上がらないように腹部をナイフで切り裂き」、それから秘密警察がヘリコプターに乗せて海に投げ捨てたものもあった。

こうした「誘拐」「連れ去り戦術」は目立たないだけでなく、社会に恐怖を行き渡らせるうえでも公然と行なわれる虐殺より効果的だった。

国家機構が人々を跡形もなく消してしまうということほど国民を不安に陥れるものはなかったのだ。

## 8

この「誘拐」↓「失踪」という戦術は、徐々に世界に知れわたるようになりました。そして誕生したのが「孤独なダンス They Dance Alone」という曲でした。

この曲はイギリスのロックバンド「ポリス」のメンバーでもあるミュージシャン、ステイングが一九八七年にリリースしたアルバム「Nothing Like The Sun（太陽でさえ及びもつかないほど【美しい】）」の中に入っています。

私がこの曲を初めて聴いたとき、その哀愁のある美しいメロディーが心に染みてきて、思わず若者言葉で言う「鳥肌が立ち」ました。歌詞とメロディーが実にみごとに一致していて、聞く人の胸を搔きむしるような観がありました。



この曲には「Cueca Solo」というスペイン語の副題が付いています。日本語にすると「孤独のクエカ」になります。クエカというのはチリの舞曲で、男女のペアがハンカチを振りながら踊るのだそうです。しかし、ピノチエト政権は、夫、息子、父親、恋人を次々と誘拐し連れ去っていきます。だから残された妻や娘、母、恋人は、「クエカ Cueca」を一人で踊らざるを得ません。愛する人と共に踊るはずのダンスを一人ぼっちで踊らなくてはならない女たち……

それをステイングは「孤独なダンス [They Dance Alone] という秀逸な曲に仕上げたのです。私がこれを聞いたとき、「どうしても授業で取り上げたい」「そして学生に歌わせたい」と思いました。歌詞の1題目は次のようになっていきます。

Why are these women here dancing on their own	彼女たちはなぜ一人で踊っているのだろう
Why is there this sadness in their eyes?	なぜその目には悲しみが宿っているのか
Why are the soldiers here	この兵士たちはなぜ
Their faces fixed like stone?	顔は石のようにこわばっているのか
I can't see what it is that they despise	兵士たちが見下しているのは何なのか
They're dancing with the missing	行方不明の者と踊っている
They're dancing with the dead	死んだ者と踊っている
They dance with the invisible ones	見えない相手と踊っている
Their anguish is unsaid	苦悩を声に出すこともなく

They're dancing with their fathers

They're dancing with their sons

They're dancing with their husbands

They dance alone

They dance alone

見えない父たちと踊っている

見えない息子たちと踊っている

見えない夫たちと踊っている

一人きりで踊る

一人きりで踊る

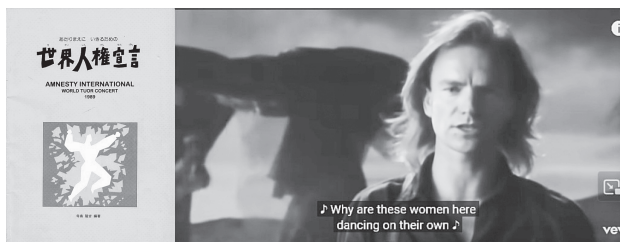
当時の私は岐阜大学教養部で英語を教えていましたから、どうしてもこの曲を教材として取り上げ、「英語を学ぶ」だけでなく「英語で学ぶ」授業をつくりたいと思ったのです。幸いにも人権団体 Amnesty International が一九八八年に世界巡業コンサート (World Tour Concert) を企画し、それをNHKが放映してくれたことも幸いました。

そのなかにSteinbergの「They Dance Alone」も入っていました。その曲に合わせて流された付属映像も素晴らしい出来栄<sup>できば</sup>えで、私の実践意欲をますますかき立てくれました。この約7分の動画のURLを次に載せておきましたのでぜひ視聴していただきたいと思います。

(この私の授業は、拙著『国際理解の歩き方』第4章「映像と音楽で学ぶ平和・人権環境」に、その実践記録を載せてあります)

\*自主教材『世界人権宣言』とSteinberg「孤独なダンス They Dance Alone」

[https://youtube/MS\\_bn5FCJTI](https://youtube/MS_bn5FCJTI) (約7分の動画)



それはともかく、チリを初めとして南米に荒れ狂った軍事独裁政権は、世界中の心あるひとの怒りをかきたてました。ステイキングもその一人だったのです。

一九四四年生まれの私にはその当時、ロック音楽は「不良の音楽」という認識しかなかったのですが、その私の認識を変えてくれたのが、ビートルズの「Yesterday」という曲だったり、このステイキングの「They Dance Alone」でした。

いずれにしても、アメリカがCIAを使って南米を荒らし回り、その結果、心あるひとたちの強い抗議の声が世界中から湧き上がることになったことは間違いありません。

前章で紹介したアメリカの「チャーチ委員会」の調査だけでなく、このような世界中から届いた声がCIAに戦術転換を迫ることになりました。

その結果、生まれたのが「カラー革命」という新しい戦術でした。本章はそれを書く予定でしたが、その前段で力尽きてしまいました。

しかし、これくらい詳しく説明しないと、アメリカ政府が世界中で展開している外交政策の無慈悲さと、CIAが戦術転換をせざるを得なくなった理由が理解していただけないと思ったのです。

と同時に、いまアメリカがウクライナを道具として使ってロシア政府を転覆または弱体化させようとしている動きも（さらには、それにも行き詰まったので、今度は焦点をイスラエルに向けさせようとしている動きも）、このような歴史的経過をふまえて初めて理解できるのではないかと思います。

ですから、このような廻り道になりましたが、どうかお許しくださいと思います。次章こそは「カ

〈追記〉

繰り返しになりますが、ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』には、チリだけではなく、CIAが軍事独裁政権を使ってブラジルやアルゼンチンなどで展開した残虐行為についても詳細な記述がありますが、そのすべてを紹介するゆとりが私にはありません。ぜひ原著を参照いただければ幸いです。

〈本章のキーワード〉

ITT (International Telephone & Telegraph Corp. 国際電話電信会社)

チリのクーデター (一九七三年九月一日)、「チャーチ委員会」による調査

「死のキャラバン」(チリのスタルク将軍が率いる殺戮部隊が展開した恐怖作戦)

「誘拐」「失踪」「連れ去り」(チリのピノチェト独裁政権が全国的に展開した恐怖作戦)

アフガニスタンにおけるCIAの「サイクロン作戦」

サルバドール・アジェンデ (Salvador Allende、チリ大統領、医学博士、元外科医)  
アウグスト・ピノチエト (Augusto Pinochet、チリの陸軍軍人、クーデター独裁者)  
フランク・チャーチ (Frank Church、民主党上院議員、「チャーチ委員会」委員長)  
ナオミ・クライン (Naomi Klein、ジャーナリスト、『ショック・ドクトリン』の著者)  
ビクトル・ハラ (Victor Jara、チリの「ヌエバ・カンシオン」(新しい歌)「運動の旗手」)  
スティング (Sting)、ロックバンド「ポリス」結成、They Dance Aloneの曲などで有名)